

## 夏は終わらない その2

「なぜ、自分はこの場所にいるのだろうか。ここにいることが間違いなく自分のためになるのだろうか。」まがりなりにも、3年間の中で、何度も何度も自問自答を繰り返したはずである。

いつの間にか時間が思うように使えなくなって、提出物も遅れがちになり、何とか間に合うように努力しても、こんなことでいいのかと思いつつ、友達のことを一生懸命写している自分が悲しくなることもあったはずだ。

他人を羨んだところで、何も残るものはないことはわかっている。自分のためにではなく、他人が活躍するための仕事であることも分かっている。例えばマネージャーだったり、補欠だったり、身体が思うように回復することを願いつつも間に合わずサブに回ったそんな自分にいら立つこともあった。

試合が終わった時に、流した涙は、そんな自分の今に後悔があったわけではなく、自分がこうと決めたことを行ってきたのだから、どうせやると決めたことなら全力でもっと違うことができなかつたのかという気持ちがよどみなくあふれてきたからだろう。

あのときああすればよかったと  
そんなやくざな假定法があるばかりに  
言葉で過去を消そうとするけれど  
目前の人っ子ひとりいない波打際は  
目をつむっても消え去りはしない  
せめて上手に後悔しようと  
過去を苦い教訓に未来を夢見る事は  
あの日のあなたのかげがえのない  
こわれやすい愛らしさを裏切ることになる  
くり返す波の教えるのは  
ただの一度も本当のくり返しは無いという事  
けもののように言葉をもたなかったら  
このさびしい今のひろがり  
無心に吠えながら耐える事もできようものを  
(谷川俊太郎「後悔—5つの感情その1」から)

今は、どうしようもなく、寂しさに独り打ち震え膝を抱えているしかないが、もう一度、立ち上がる力が自分の足によみがえってきたときには、前よりもっと高く飛び立てるはずだ。その時をひたすら待つ。

きっと、この2年と数か月の間の様々な事柄が、その力をもたらししてくれる。私は、あなたを信じている。私はあなたを、信じている。

あなたがこの学校で過ごしてきたその時間の正しい意味を私はこの目で見えてきたのだから。